

牧師、バイカー、鮫職人として。。。シェア from LA 第69話 「兄貴との思い出、前篇」

私は3人兄弟の長男なので兄貴はいないが、兄貴と呼べる男はいる。10歳年上のダンはその一人だ。彼との出会いは20年ほど前にさかのぼる。私が17歳の頃に出た81年型ハーレーのショベルヘッドエンジンを積むワイドグライド(FXWG)は当時300万円もした。渡米してからも、いつかそれを買いたいと考えていたが、ついにその夢が叶ったのも約20年前だった。値段は1万ドル、典型的な“大人買い”だ。

当時、私はLA(ロサンゼルス)の南にある街の小さな鮫屋で板長をしていた。その隣は銀行だったが、ある日、体のデカイ白人バイカーの乗るショベルヘッドのハーレーが銀行の前に止まった。彼はすぐに銀行へ入って行ったが、店からその様子を見ていた私は何となく彼のハーレーに近づき眺めていた。同じショベルヘッドのエンジンでキック付き、ワイドグライドではなくローライダーだった。

ほどなく銀行から出て来た彼と初対面し、互いに今や旧式になったキック付きショベルヘッドのハーレーを愛する者どうし仲良くなった。しかも彼の奥さんは日系4世だというおまけまでついた。彼は男でも惚れたいくなるほどの良い奴で、デカイ体に似合わず穏やかで優しい男。気性の激しい私とは正反対だった。あちこち走ったり、酒を酌み交わしたり、バイクショーに行ったりした。サイコーに楽しかった。また、40歳にもなって、しかも異国で親友が出来たことに感謝した。

あの頃の私はクリスチャンではあったものの、いつもイライラして荒れていたが、数年後、神からの召命が突然に下り、雷に打たれたように私の人生は変わった。牧師になる勉強を始め、曲折を経てついに牧師となり、何と自分で教会を始めた。真っ先に報告をした相手の一人が彼だった。彼はLA、私はOC(オレンジ郡)で距離があるため、その中間地点のフラトン市にあるハーレーディーラーで彼と落ち合い、福音を伝え、今後BS(バイブルスタディー)をこのハーレーディーラーで始めることで合意して共に祈った。

だが、それを境に彼と二度と会うことはなかった。彼はイタリア系カトリックでクリスチャンを自認する者ではあるが、福音とキリストには全く興味を示さなかった。むしろ無意識に拒絶し、私を避けるようになった。

そう言えば、その昔、「ミッキー、お前は“モーターサイクル・ベル”をハーレーに付けたか？」とダンが尋ねてきたことがあった。「何ソレ？」と聞くと、「何だ、知らんのか？路上には多くの“デーモン(悪霊)”がいるのでベルで追い払うんだよ。」いわゆる魔除けだ。故障や事故を悪霊と解釈した者たちが始めた風習らしい。そう。つまり彼は何も信じていなかった。また、そういう人間ほどスピリチュアルなもの、パワースポットや御守りに凝る。カトリックだろうがプロテスタントだろうが無関係。神を信じるとは、単に神の存在を信じることではない。神に従うことだ。だから“従えない人”は必ず疎遠になる。教会からも、私からも、神からも。彼はその典型例になってしまった。イエスが言うとおりに。

「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、
天におられるわたしの父の御心を行う者が入るのです。」 マタイの福音書7章21節

